

令和 4 年 6 月 12 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00124

研究課題名(和文) 大正期から昭和初期におけるピアノ演奏法とその指導法の発展 園田清秀を中心に

研究課題名(英文) Development of piano performance and its teaching method from Taisho to the early Showa period: Focusing on Kiyohide SONODA

研究代表者

山下 薫子(坂田薫子)(YAMASHITA (SAKATA), Kaoruko)

東京藝術大学・音楽学部・教授

研究者番号：90283324

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、園田清秀(1903-1935)の音楽教育の方法論とその成立過程の検討を通して、大正期から昭和初期における西洋音楽受容史および音楽教育史に新たな一面を加えることである。具体的には、彼の著作物と自由学園での実践に関する資料の分析、関係者へのインタビュー、そしてパリでの歴史資料の調査などを行った。その結果、ピアノ奏法が重視されていた時代において、幼児期の発達を基礎におくピアノ指導法を確立したという彼の功績を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究における学術的意義は、次の3点に集約される。一次資料に基づいて、園田清秀に関する通説の誤謬を正したこと。インタビューと資料探索により、彼の教育哲学の形成過程を示す新たな情報やデータを得たこと。ピアノ指導法発展の歴史認識に、教育学の観点から新たな知見を付与したこと。

本研究を通して、人物研究、とりわけ音楽教育学の歴史的研究では、学習者にかかわる記録の存在が研究の質を左右するという方法論上の示唆を得た。

研究成果の概要(英文)： This study aims to add a new dimension to the history of acceptance of western music and music education from Taisho to the early Showa period by examining the musical method and its formation process by Kiyohide SONODA (1903-1935).

I specially analyzed his writings and the practice materials at JIYU GAKUEN, interviewed the key persons, and investigated historical materials in Paris with my research collaborators.

As a result, I recounted the process of formation of his educational philosophy. I clarified his contribution that he had established a piano method based on early childhood development in an era that emphasized how to play the piano.

研究分野：音楽教育学

キーワード：園田清秀 ピアノ指導法 西洋音楽受容史 音楽教育史

1. 研究開始当初の背景

園田清秀(1903-1935)は、絶対音感の習得を基礎とした音楽早教育の創業者として知られる。大分市に生まれ、東京音楽学校でピアノを学ぶ。音感指導の必要性を痛感した彼は、地元大分の音楽関係者とともにその方法を実験し、さらにフランス留学からの帰国後、長男、高弘を実験台にした指導の成果を発表した。このニュースは新聞で大きく報じられ、東京の自由学園で実践が始められるなどの発展を見せたが、清秀は32歳の若さで急逝する。

これまでの通説では、清秀の遺業が笈田光吉(1902-1964)に引き継がれ、第二次世界大戦の波に飲み込まれて、軍事教育の一環として利用されたと言われてきた。しかし、清秀が創案した指導法の具体的な内容と方法は詳らかにされておらず、その後の継続性は確認されない。では、彼の教育観や教育理念はどのように形成され、独自の方法論を編み出すに至ったのだろうか。

東京藝術大学の音楽総合研究センターには、園田高弘(1928-2004)の遺族より寄贈された清秀の書簡やノート、写真、未発表の資料などが未整理のまま保管されていた。これらが、西洋音楽受容史や音楽教育史の観点から見て、非常に貴重な一次資料であることに間違いはない。そこで、この史資料を丹念に整理、解析して、上述の疑問を解決し、彼の功績を音楽史の文脈の中に適切に位置づけようと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、次の3点を明らかにすることを目的に構想されたものである。清秀の教育理念と独自の方法論が形成された背景や経緯、清秀が創案したピアノ指導法の具体的な内容と方法、大正期から昭和初期の西洋音楽受容史と音楽教育史に果たした清秀の功績。それぞれの具体的内容としサーチクエスチョンを以下に記す。

について、通説では、パリでの留學生活の中で、音感指導の必要性を痛感し、独自の方法を編み出したということになっている。しかし、音楽総合研究センターに収められている『子供のPiano練習法』というノートには、「1929年」と記されていることから、彼が教育に関心をもったのが、1931年の留学より前だったことは明らかである。では、その指導法はいつ頃どのように着想され、形成されたのだろうか。

は、本研究の中心的な課題である。清秀が創案した指導法は、「絶対音早教育」や「絶対音養成を含めるピアノ新教育法」、「絶対音音楽早教育」など様々な名で呼ばれ、その内容は限られた部分しか明らかにされてこなかった。その全体像を明らかにするためには、彼の著作物に加えて、子供たちの様子を含めた記録の入手が必要不可欠となる。彼の指導の構想は、自由学園に集った子供たちのために、どのように具現化されていたのだろうか。

について、園田清秀の功績はこれまで音感訓練の成立過程と関わって語られることが多かったが、実際に彼の目指したところは、音感指導にとどまるものではなく、ピアノ指導法の改善にあったと考えられる。では、彼が子供のためのピアノ指導法を創案した大正期から昭和初期という時代において、一般にどのような指導が実践されていたのだろうか。そして、その中で清秀が果たした貢献は、いかなるものであっただろうか。

3. 研究の方法

本研究では、上述の目的に応じて、次の5つの方法を用いた。東京藝術大学音楽総合研究センターに収蔵された清秀資料の整理とアーカイブ化、東京音楽学校時代の一次資料との照合、彼の著作物および自由学園での実践に関する資料の分析、関係者へのインタビューと資料の収集、フランスにおける文献調査および関係者へのインタビュー。

では、4名の研究協力者を得て、史資料の整理と分類を行った。具体的には、史資料の年代の判別や写真の被写体の特定などである。この作業で得られた情報はすべて、アーカイブ構築に向けて電子化した。

については、東京藝術大学大学史史料室に保存されている「入学願書」、「学籍簿」、「学年試験成績」や『東京音楽学校一覧』などの一次資料の中から、清秀に関する情報を拾い出し、先行研究で明らかにされてこなかった来歴や音楽歴の空白を埋める作業を行った。

としては、音楽総合研究センター所蔵『子供のPiano練習法』(未出版)と『子供のピアノ』(全二巻)『婦人之友』に掲載された清秀の論考、および新たに入手した『絶対音音楽早教育第1回実験報告(1937)』[自由学園音楽グループ](自由学園資料室提供)に基づき、具体的な指導内容と方法を分析するとともに、その教育理念について考察を加えた。

は、清秀の学生時代からの友人であり、その遺志を継いだ小澤弘(1902-1969)と城多又兵衛(1904-1979)の遺族から、清秀の留学や長期的な構想に関する証言を得るとともに、演奏会プログラムなどの新しい資料を提供していただいたものである。

そして、研究分担者と研究協力者の協力を得て実施した。具体的には、清秀が留学した1930年代のパリで大きな影響力を有していた2名のピアニストに関する文献の収集と、清秀が師事していたとされるロベール・カサドシュ(Robert Casadesus, 1899-1972)をよく知る人物へのインタビュー、パリ国立音楽院の試験問題の検討などを行った。

4. 研究成果

(1) 本研究の成果

4年間にわたる本研究の主たる成果は、次の4点にまとめることができる。

園田清秀の来歴に関する誤謬を正したこと

清秀の来歴は、長年にわたり高弘の著書や郷土の資料などに基づいて理解されてきた。しかし、その情報を整理し、体系化する上で、整合性の取れない点や不明確な点が多数浮かび上がった。そこで、東京藝術大学大学史史料室に保存されている上述の史資料や大分県先哲史料館の収蔵史料目録(史料館提供)などと照合した。その結果、入学年度や指導教員、留学年などについて、通説の誤りを指摘し、正した(山下2020, 2021)。

これに加えて、これまであまり知られていなかった清秀の演奏歴について、新たな一次資料に基づき、その一部を明らかにした。さらに、同大学音楽総合研究センターの「園田高弘文庫」に所蔵されている清秀のプログラムや書簡、写真類などの一次資料を整理、分類し、「園田清秀資料一覧」として公表した(山下2021)。

清秀の教育理念と「絶対音音楽早教育」の成立過程の一部を明らかにしたこと

前述のとおり、清秀の方法論は絶対音感の習得を基礎としていたが、絶対音感の育成は、あくまでも手段であり、目標は、手紙を書くかのように、思い付くままに音符を書き止められる子供の育成にあった。つまり、彼の目指すところは、当時、天分がなければできないと考えられていた音楽の教育を、万人に開くことにあった。そのためには、子供の発達を考慮し、適切な時期を見極めて教育を始めることが重要であると説いた。そして、その方法は万人の教育であると同時に、音楽の専門家への道をも開くものでなければならなかったのである。

方法上の特徴としては、幅の広い五線や大きな音符を使用すること、音の記憶には単音ではなく和音を用いること、物語によって教則本の進行を助けることなどが挙げられる。これらはいずれも、子供の感性や理解に寄り添おうとしたものであり、そのヒントとなったのは、小学読本の教科書であった。

さらに、自由学園での実践報告からは、清秀が子供たちをよく観察し、期待どおりの結果が得られない場合には別の方法を試すなど、絶えず指導方法に改善を加えていた様子が窺える。つまり、彼の教育方法は、まさに子供たちとの相互作用によって確立されたと言えるだろう。

大正期から昭和初期のピアノ指導の歴史に清秀の貢献を位置づけたこと

清秀が音楽の道を志した大正期、ピアノ教則本と言えば、おおよそ姿勢や手指の形、打鍵法と運指法という項目から始まっていた。昭和初期になって、バイエルやチェルニー、ソナチネなどの導入期の教則本は、編者の異なる複数の版が世に出るようになっていたが、いずれも輸入楽譜と同様の狭い五線が使用されていた。そのような時代に清秀は、子供の感覚や認知能力、記憶力等の発達を基礎とした指導法を確立したのである。

清秀が起こした改革は、言うなれば西洋音楽受容史および音楽教育史、そして音楽教育研究の歴史におけるパラダイム転換であったと考えられる。

1930年代前半のパリにおけるピアノ指導とソルフェージュの実態の一部を解明したこと

当時、大きな影響力をもっていたピアニスト、ナディア・ブーランジェとギャビー・カサドシュに関する文献の検討、インタビューデータの分析、そしてパリ国立音楽院の試験問題の考察を行った結果、当時のパリにおいては、「身体で音楽を感じ取ること」と「音楽の呼吸を読み取ること」、「耳を訓練すること」の3点が特に重要視されていたことを突き止めた(甲斐・井上2022)。

さらに、ロベール・カサドシュが、ジャック＝ダルクローズの弟子を多く抱えていたことも明らかになったことから、間接的にはあっても、清秀がリトミックを知る機会があったのではないかと推察される。

(2) 今後の展望

今後、解決すべき更なる課題として、次の3点を挙げておきたい。

大分県での実践と普通教育への影響

清秀によって創案された方法論は、自由学園のほかにも、「大分県ピアノ研究会」のメンバーによって実践されており、戦後そのメンバーが核となって大分県音楽教育研究会が結成されていることが分かった。では、清秀の方法論は学校教育の場でどのように展開されたのだろうか。関係資料を収集し、同県の小中学校の音楽教育に対する清秀の影響について探っていききたい。

ロベール・カサドシュの叔母(あるいは伯母)との交流

フランスでの調査により、当時の音楽教育の一端は明らかにすることができたが、清秀留学時のロベール・カサドシュの動向をみると、清秀がパリ滞在中にカサドシュから継続的なレッスンを受けていたとは考えにくい。実際には彼の叔母(伯母)に当たる人物から指導を受けたという証言もあることから、その指導や交流の実態を明らかにするべく、資料探索を継続したい。

昭和期におけるピアノ演奏法の発展

清秀は、幼児を対象とした導入期のピアノ指導では、奏法について言及しない方がよいとしていたため、今回の研究期間には、当時のピアノ演奏法の発展について、新たな知見を得ることができなかった。今後は、高弘の周辺をも視点に含めながら、昭和期のピアノ演奏法発展の歴史に迫っていききたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山下 薫子	4. 巻 令和元年度
2. 論文標題 昭和初期におけるピアノ指導法の発展 園田清秀を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 全日本音楽教育研究会大学部会誌	6. 最初と最後の頁 16-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下 薫子	4. 巻 47
2. 論文標題 園田清秀の「絶対音音楽早教育」 その歴史的意義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京藝術大学音楽学部紀要	6. 最初と最後の頁 131-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 甲斐 万里子・井上 貴世子	4. 巻 8
2. 論文標題 パリにおける1930年代前半のピアノ指導 - G. カサドシュの弟子へのインタビュー及び試験問題の検討を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 和洋女子大学教職教育支援センター年報	6. 最初と最後の頁 62 - 69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山下薫子
2. 発表標題 昭和初期におけるピアノ指導法の発展 園田清秀を中心に
3. 学会等名 令和元年度全日本音楽教育研究会全国大会（於 武蔵野音楽大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山下薫子
2. 発表標題 日本のピアノ指導法発展における園田清秀の功績 園田高弘の所蔵資料の分析と聞き取り調査を通して
3. 学会等名 日本音楽教育学会第52回大会（京都教育大学（オンライン開催））
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 甲斐 万里子・井上 貴世子
2. 発表標題 1930年代のパリにおけるピアノ指導 G. カサドシュの弟子へのインタビュー及び試験課題の調査を通して
3. 学会等名 日本音楽教育学会第52回大会（京都教育大学（オンライン開催））
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	甲斐 万里子 (KAI Mariko) (30803689)	和洋女子大学・人文学部・助教 (32507)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	井上 貴世子 (INOUE Kiyoko)		
研究 協力者	饗庭 裕子 (AIBA Hiroko)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	田舎片 麻未 (INAKAGATA Asami)		
研究協力者	庄司 健人 (SHOJI Kento)		
研究協力者	東屋敷 尚子 (HIGASHIYASHIKI Naoko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関